

青年期のキャリア発達における 自己理解に関する一考察 —大学院生の自己理解プログラム学習を通して—

白木みどり
上越教育大学

1. はじめに

上越教育大学の白木と申します。本日は発表の機会をいただき、ありがとうございます。しばらくの間、私の話におつき合いいただければと思います。よろしくお願いたします。

本学には、目的意識を持った学生が多く集まります。そのほとんどは教員志望です。

本学には上越スタンダードというプログラムがあり、初年次教育は必修授業として位置づけられています。また、エンロールメント・マネジメントの方策に近づきたいという考えから、4月に1泊2日の合宿を行うなど、多くの教員が学生にかかわるための仕組みをつくっています。初年次のための特別カリキュラムも用意し、大村はま先生の著書の輪読会などを行うほか、各クラスでは専門書の輪読会や弁論大会なども行っています。

2. 就職活動に失敗したから学校の先生に

川嶋先生、井下先生、西村先生の魅力的なプレゼンテーションをうかがっていて、自分の行おうとする発表がとても観念的であることに気づきました。

私の発表は、「青年期のキャリア発達における自己理解に関する一考察」と題しています。なぜ自己理解に注目したのかについて、まずご説明しましょう。

本学の大学院1年次の教育、大学院における初年次教育は、非常に危機的な状況にあります。教育学を学ぼうとして大学院に進学した学生であっても、研究者になろうと志しているのではなく、教員になろうとしている学生が大半だからです。本学には、学部時代に教育学を学んだことがない学生でも、大学院3年間で教員免許が取得できる免許プログラムがあります。小学校、中学校、高校と複数の教員免許を取得する学生もいます。教員免許も修士という学位も得られるプログラムがあることも、危機的状況を招いた一因かもしれません。教育学に全く触れてこなかった大学院1年生をどのように教育学フィールドに乗せるかが、私たちの大きな課題になっています。

免許プログラムを履修した大学院1年生に、大学院に進学した動機を尋ねると、「就職活動に失敗したから、学校の先生にでもなろうかと思いました」といった、耳を疑うような答えが返ってくることは珍しくありません。小学校、中学校、高校の教員をしてきた私はもちろん、教育学の研究者であれば誰もが、「『先生にでもなろうか』とは何事か」と感じるでしょう。こうした学生を教育学フィールドに乗せるためには、まず、教師という職業に対する価値観を変えていかなければなりません。

「就職活動に失敗したから、学校の先生にでもなろうかと思いました」という発想は、どのような社会背景から生まれるのでしょうか。まず、将来についての選択肢が拡張して

いるということが考えられます。さらに、選択時間が伸びているということが挙げられます。選択決定を迫られる時期も柔軟化していることから、決定にさらに時間をかけるようになるのだと思います。つまり、学生は意思決定から逃亡する傾向にあるわけです。逃亡を繰り返して、漂流していると言ってもよいでしょう。また、資格社会という言葉も、学生に「資格を取れば何とかなる」という思いを抱かせているのかもしれませんが。

こうした学生には、勤労観や職業観も育成する必要があります。そのために、大学院初年次に何をすべきかを考えた結果、自己理解という結論に達したのです。

3. 「人はそれ自身における目的として存在する」

大学院、あるいは大学に進学したばかりの学生に、これから何をすべきか、しなければならぬかを考えさせようとする時には、大学院や大学の向こう側にある社会を意識させなければなりません。また、自分がこれまで生きてきた過程、これから生きていく過程、つまり人生というものを自分のこととして捉えさせることは、大人になる上でとても重要です。

私の専門フィールドは、道徳教育とキャリア教育なのですが、大学院での初年次教育について考える中で、「人はそれ自身における目的として存在する」というカントの言葉思い出しました。カントのこの命題に対して、和辻哲郎は、欲求から意志、そして目的に至るプロセスを論じています。欲求から意志への移行は、次のように説明されます。受容や受容の契機といった感覚的なものを全て除いた末に、自発的に出てくる欲求、換言すれば、自分自身から出た、自分自身の行為を規定するという欲求、これが意志につながる、と。

人間は生きていく中で、自分自身の意志によって行為を規定していく。こうした発想から和辻は、意志とは自己が自己を実現する能力であると述べています。意志が自己を規定することによって、決定の客観的な根拠は目的となっていきます。意志があるからこそ、目的が明確になっていきます。

和辻はまた、「人格と人類性」という書物で、人間の意志がどのように発生するのか、そこに何が作用しているのかについて考察し、自己を見つめれば欲求が明らかになり、欲求到達を志向するものとして意志が生まれると述べています。そうであれば、学生には自分自身をしっかりと見つめさせる必要があるはずです。

近頃の学生を見ていると、根拠のない自信を抱いているように感じます。「この自信はどこからくるのだろうか」と不審に思うほど、自信に満ち満ちている学生にしばしば出会うのです。その一方で、自己否定感にさいなまれ、人と交われなくなって孤立していく学生も一人や二人ではありません。

4. 記憶力すなわち学力という構造の功罪

今、私は根拠のない自信と言いましたが、その学生に言わせると、おそらく根拠はあるのでしょう。では、その根拠の源はどこにあるのか。これを考えると、答えの一つとして学歴社会が挙げられるのではないかと思います。学力試験は記憶力によって解ける問題が多くを占めています。記憶力すなわち学力という構造です。記憶力のよい子どもはこれに答えることができますから、得点が高くなります。得点の高い子どもを、多くの大人は能力がある子どもと捉えていたでしょう。学力すなわち能力であると理解している大人がつ

くった環境の中で、子どもは生きてきたわけです。ここに、学生の抱く自信の根拠を見ることはできないでしょうか。

また、学生が抱く自己否定感も、学力を自分の能力であると考えていることに要因があると、私は考えています。大学進学率が50%を超え、同世代の半数以上の子どもが大学に進学しています。自分には能力がないと思っている学生は、かなり多く潜在しているかもしれません。

5. 学生一人ひとりの個性、能力、適性に合った課題の提示を

私たちは、初年次の大学院生を対象に1日のセミナーを行い、さまざまな方法で学生の自己理解を深化させました。その報告とともに、今後、どのような視点を学生に持たせる必要があるかをお話したいと思います。資料をご覧ください。

「自己理解・自己管理能力」は、平成23年の中央教育審議会の答申で「基礎的・汎用的能力」の一つとして挙げられています。社会的・職業的自立、学校から社会・職業への円滑な移行に必要な能力であると位置づけられているわけです。定義は次のようになります。

「自分が『できること』『意義を感じること』『したいこと』について、社会との相互関係を保ちつつ、今後の自分自身の可能性を含めた肯定的な理解に基づき主体的に行動すると同時に、自らの思考や感情を律し、かつ、今後の成長のために進んで学ぼうとする力である」。

私は小学校から高校までのキャリア教育を中心に研究しています。学生が自己否定感を抱く要因は幼少期からの生育歴にもあるはずですが、それよりも一斉授業の中で同じ課題によって、繰り返し同じ基準による評価を受けてきたことにあると考えています。同じ課題による評価では、自己肯定感が高まる子どもと、そうでない子どもとに分かれざるを得ません。試験の得点、学力、記憶力を評価され続ける子どもは自己肯定感が高まるでしょう。一方、得点が低い子どもは自己否定感を強めるはずですが、これを改善するためには、違う課題を与えることが非常に重要になってきます。大学生にも同じことが言えると思います。

授業では、統一された課題、統一された基準による評価を行っています。しかし、大学生活、学生生活の中では、学生一人ひとりの個性、能力、適性に合った課題を提示できるのではないかと、また提示する必要があるのではないかと、私は考えています。

6. 自己をもっと深化させ、多様な視点から自己を見つめる

中央教育審議会は、2011年度の答申で「自己理解能力は、生涯にわたり多様なキャリアを形成する過程で常に深めていく必要がある」と述べています。人間が生きていく中で切り離すことができない力ということです。キャリア教育が生涯教育と言われる所以でしょう。

人間は自分との対話によって、自分に価値観を見だし、進路を選択します。これを繰り返して人生を築いていくと言ってもいいでしょう。自己を知ることの重要性は明らかです。ただ、自己理解や分析にとどまるのではなく、知った自己を管理する能力、コントロールする能力も必要です。この力を身につけてこそ、よりよく生きることができると、私は考えています。

私たちが初年次の大学院生のためのセミナーで行ったことの一つに、スライドのような2枚のワークシートがあります。1枚目は自分の対人関係に気づくためのシートで、ジョハリの窓と呼ばれます。2枚目はマンダラートで、本来は企業が新商品を開発するにあたり、何が必要かを多様な視点から分析するために用います。ここに、自分はどのような人間なのか、今何を考えているのか、何に価値を見いだしているのかなどを書き込ませました。

2枚をシェアリングしたところ、学生には自分自身に対するさまざまな気づきがあったようです。「自分は自分をこう思っていたけれど、他者からはそう見られていたのか」「自分のこの部分は誰にも知られていないと思っていたけれど、気づいている人がいたのか」といった具合です。

そして、発達段階を知っておいていただきたいと思います。

発達段階の課題の中で自己理解がどのように取り上げられているかという点、自己にかかわることは小学校から始まり、中学校では肯定的自己理解と自己有用感の獲得が発達段階の課題の一つとなります。高校では自己理解の深化と自己受容が課題となり、自分の良いところも悪いところも認められることが求められます。それを受けての大学初年次であるわけですから、自己をもっと深化させ、多様な視点から自己を見つめるという作業を丁寧に行う必要があります。

7. 自己概念の発展と受容が非常に重要に

私たちの取り組みのベースには、職業的発達理論があります。これはアメリカの研究者D・E・スーパーが1950年代に提唱した、概念形成の重要性を裏づける理論です。発達理論の中に職業的な自己概念を加えたところに特徴があります。キャリア教育では、この職業的発達理論をベースにした研究が進みました。文部科学省が提唱している学校教育におけるキャリア教育も、これに基づいています。

職業的発達理論では、自己概念の発展と受容が非常に重要であるとしています。そして、職業的な概念を形成するものとして、才能、個性、欲求、興味、特性そして自己概念を挙げています。また、キャリア教育における探索と現実吟味、および自己概念の吟味も重視します。吟味するとは、ただ自分はこういう人間であると分かることだけを意味するものではありません。至らない自分や不十分な自分、できない自分、不足している自分などを明らかにし、受容した上で、さらに次に向かうということも意味しています。

職業的概念形成の基盤となる自己理解とは、自分自身を職業的に捉えた時、何ができ、どのような価値観を持っているのかを明確にするということです。私は、価値観が人の生き方を左右するのではないかと考えています。能力や個性、才能、欲求といった先天的なものの中には一生変わらないものがありますが、価値観の変容によって変わるものもあります。そうであれば、自己概念の中の価値において、いろいろなものを変容する可能性を秘めていることを知らなければなりません。

価値、価値観というものは、さまざまな相互作用によって形成される側面がありますから、自己理解や自己管理の作用側面、作用支点を仮想することによって自己変革を起こすことができます。自己理解や自己管理の支点、方向性が、学生自身の中で変革を起こしていくきっかけの一つになるということです。

8. 自己理解能力、自己管理能力を育成するためのプログラムを

現代の大学生も子どもも、現象面を捉える教育しか受けてきませんでした。原理面を追究する教育は受けてこなかったわけです。原理面の追究とは、どのようなことかをご説明しましょう。今の日本社会では、150円ほどの対価を払えば500mlのペットボトル入り飲料を手に入れることができます。それが当たり前だとされる社会に、大学生も子どもも生きています。では、なぜ150円払えばペットボトル飲料が手に入るのか。これを考えることが、原理の追究です。追究していけば、現代日本の社会構造と、その中で生きている自己の存在に気づくでしょう。

ペットボトルが生産され、自分の手に入るまでの道筋を遡ると、茶葉の生産者、水の品質を検査する人、茶葉を採取するための機械の設計者、その機械の製造者、機械を製造するために必要なボルトを製造する人、ボルトをデザインする人、商品のキャッチコピーの考案者、商品のCMの制作者、商品の輸送者などさまざまな人の存在が見えてきます。さらに、輸送には燃料が必要で、その燃料は外国から来ること、燃料を使ってトラックが走り、そこには運転手がいること、トラックの製造者もいれば、トラックのタイヤを作る企業もあることなどにも思い至り、無数の人のかかわりを経て、自分が商品を手に行っていることに気づくでしょう。つまり、社会とは人間のエネルギーによって構成され、さらには文化や文明そのものが多くの人々の手を経て成立したものであるという原理を見いだせるはずで

ところが、学校教育で原理を追究する場面はなく、表層だけをさらっているのではないのでしょうか。例えば、「国民の義務を一つ挙げなさい」という設問には、多くの子どもは「納税」と答えられるでしょう。納税が義務であるという知識はあるわけです。しかし、納税の義務がどのように自分とかかわっているのかを答えられる子どもは少ないのではないのでしょうか。そのための学びを受けてこなかったからです。だからこそ、学校から社会へ移行しようとする大学生、大学院生に社会を見せ、社会で自分に何ができるのか、自分がどのような特性を発揮できるのかを考えさせなければなりません。考えるためには自己理解能力、自己管理能力が必要ですから、これを育成するためのプログラムを初年次から計画的、系統的に行うことが求められます。

9. 経験的な自己と仮想的な自己の両方を見つめる

自己理解のためには、経験的な自己と仮想的な自己の両方を見つめることが重要であると、私は考えています。経験的な自己とは、これまでの経験によって生まれている自己。仮想的な自己とは、近い将来、遠い将来を仮想して生まれる自己です。

スライドをご覧ください。これは、先ほどお話しした初年次の大学院生のためのセミナーの最後に書かせたリアクションペーパー、感想を分析したものです。自己理解について、次の五つの特質が抽出されました。1)変化するということ。2)停滞するということ。3)深化するということ。4)継続するということ。5)自己管理能力と時に追従し、時に乖離するということ。つまり、自己を理解したからといって、自己を管理できるとは限らないわけです。

また、自己理解のための視点としては、次の七つが抽出されました。1)個性・能力・適

性。2)見たくない、見ようとしないうちの自己。さまざまな演習を通して、これまで目を背けてきた自己を見ようとしているわけです。3)秘められた能力と可能性のある自己。4)集団的、社会的視点から見る自己。5)他者からの理解と指摘による自己。6)長期的視野で見る自己。7)不動の自己。信念を持った自己と言ってもよいでしょう。キャリアアンカーにつながるものです。

10. 大学全体として目標を設定することが重要

自己管理能力を向上させるための視点を六つ挙げてみました。いずれも、生涯を通して行われていくことが理想です。1)自己肯定感の吟味。批判的に自己を見つめ、本当に肯定感を得ているのかを確かめるということです。2)自己否定感の翻訳。自覚している良くない面を、ポジティブに捉える視点、ポジティブなものに変換する視点です。3)発達段階、成長過程の通過点でのチェック。4)判断と改善、改良の意思決定。5)訓練、自己指導。6)生涯的自己指導。

さらに、生きていく上での自己理解・自己管理の視点も六つ挙げてみました。このような視点を学生に気づかせることが重要です。1)もの、人、事との出会い。出会った中で自己をどのように位置づけるかということです。2)どう意味づけるか。これは、修学以前の段階から重要になると、私は考えています。無自覚、無意識のうちに、無意識のうちに学んでいること、活動していることはたくさんあります。それが学びとなるかどうかは、意味づけにかかってきます。意味づけられなければ学びにはなりません。過去を振り返り、「あの時学んでいた」と気づけば、後から学んでいることにはなりません。その経験をしている時に、「今、学んでいる」と意味づけられれば、効率的に学ぶことができます。そうであれば、初年次に行う学習が、将来、どのような意味や意義を持つのかを、学生にしっかり伝える必要があるのです。教員がレクチャーするだけでなく、学生自身が感じ取れるように授業を工夫することも求められます。3)何、どちらを選択するか。4)どのように行動するか。5)どこを振り返るか。6)どう改善するか。以上六つの視点を持つことによって、学生の発達は促進されるはずです。さらに、自己との対話を通して、自己を受容し、適応させ、創造することも可能になります。自己の創造は、後天的に備わる能力、向上する能力がいかに大きいかにかかわらず学生が気づくところから始まります。

最後に、学校教育での方策を七つ挙げてみました。1)目標の設定。意図的、計画的活動。先ほど、西村先生のお話にもありましたが、大学全体として目標を設定することが重要です。この学生たちをどのように社会に送り出すのか、4年間のスパンの中で何ができるか、教職員の間でこうした意思形成を行いましょ。2)組織的、体系的取り組み。これについては、カリキュラムを編成し、組み込んでいく方法も考えられます。3)生徒・学生理解と情報の共有。これは、エンロールメント・マネジメントで行う学生指導につながると考えています。4)学習内容の工夫と魅力ある授業の創造。5)教師自身の自己理解と自己管理能力。6)教師間の協力・協働。7)学習環境の整備と充実。

11. 最後に

教育で大切なものは何か、教育は何のためにあるのか。私はいつもこれを考えています。また、教育の目的は人類の発展と平和の実現にあると考えています。

グローバル社会，国際競争の中，若者は厳しい時代を生きていきます。社会の中でどのように自分を生かすか，どのような自分の役割を果たすかを模索することになるでしょう。社会での試練を乗り越える力を育成することこそ，キャリア教育の使命だと思います。

島崎藤村に，教育の原理原則を物語っているかのような文章があります。この名文をご紹介します，発表を終わりたいと思います。

「人の世に三智がある。学んで得る智，人と交つて得る智，みづからの体験によつて得る智。さういふ自分は今日に行き詰つてゐるばかりでなく，出発のそもそもからずでに行き詰つてゐた。でも，歩いて出るたびに道が開けた。地に触れるたびに生き返つた。」

ご静聴ありがとうございました。

青年期のキャリア発達における
自己理解に関する一考察
—大学院生の自己理解プログラム学習を通して—

上越教育大学大学院
白木みどり

1

【自己理解・自己管理能力】

自分が「できること」「意義を感じるこ
と」「したいこと」について、社会との相互
関係を保ちつつ、今後の自分自身の可能性を
含めた肯定的な理解に基づき主体的に行動す
ると同時に、自らの思考や感情を律し、かつ、
今後の成長のために進んで学ぼうとする力

＊平成23年中央教育審議会答
申
第1章3(2)「基礎的・汎
用的能力」解説より

2

この能力は、子どもや若者の自信や自己肯定観の低
さが指摘される中、「やればできる」と考えて行動できる
力である。また、変化の激しい社会にあって多様な他
人との協力や協働が求められている中では、自らの思
考や感情を律する力や自らを研さんする力がますます
重要である。これらは、キャリア形成や人間関係形成に
おける基盤となるものであり、とりわけ自己理解能力は、
生涯にわたり多様なキャリアを形成する過程で常に深
めていく必要がある。

具体的要素としては、例えば、自己の役割の理
解、前向きに考える力、自己の動機付け、忍耐力、ストレス
マネジメント、主体的行動等が挙げられる。

3

自分

他人	知られていない 隠された自己 Blind Self	知られている 公開された自己 Open Self
	他人から思わ れている自己 Blind Self	他人から思 われない自己 Blind Self

図1 ジョハリの窓

図2 マンダラート

こんな場所へ行
きたい

こんな仕事がし
たい

こんな進路計
画を立てている

こんな趣味を持
ちたい

こんな挑戦がし
てみたい

こんなものを手
に入れたい

4

小学校・中学校・高等学校におけるキャリア発達

小学校	中学校	高等学校
＜キャリア発達段階＞		
進路の探索・選択にかかる 基盤形成の時期	現実的探索と暫定的選択 の時期	現実的探索・試行と 社会的移行準備の時期
自己及び他者への積極的 関心の形成・発展	肯定的自己理解と自己有用 感の獲得	自己理解の深化と自己受容 感の獲得
身のまわりの仕事や環境へ の関心・意欲の向上	興味・関心等に基づく勤労 観、職業観の形成	選択基準としての勤労観、 職業観の確立
夢や希望、憧れる自己イ メージの獲得	進路計画の立案と暫定的選 択	将来設計の立案と社会的移 行の準備
勤労を重んじ目標に向かっ て努力する態度の形成	生き方や進路に関する現実 的探索	進路の現実吟味と試行的参 加

(出典) 文部科学省「小学校・中学校・高等学校 キャリア教育推進の手引」(平成18年11月)

5

職業的発達理論 スーパー-Super, D. E.

職業発達の過程

- 自己概念(self concept)の発展と受容
(才能、個性、欲求、価値、興味、特性そして自己概念)
- 探索と現実吟味
- 自己概念の吟味(職業的自己実現)

職業的自己概念形成の基盤となる
自己理解

6

自己理解・自己管理能力について
講義後のリアクションペーパーより

- A 自己理解は変化(更新)する
- B 自己理解は停滞する
- C 自己理解は深化する
- D 自己理解は継続する
- E 自己理解と自己管理能力は、時に追従し乖離する

7

自己理解のための視点

- a 個性・能力・適性
- b 見たくない、見ようとしていない自己
- c 秘められた能力と可能性ある自己
- d 集団的、社会的視点から見る自己
- e 他者からの理解と指摘による自己
- f 長期的視野で見る自己
- g 不動の自己(キャリアアンカー)

8

自己管理能力向上の視点

- ◆ 自己肯定感の吟味
- ◆ 自己否定感の翻訳
- ◆ 発達段階、成長過程の通過点でのチェック
- ◆ 判断と改善、改良の意思決定
- ◆ 訓練、自己指導
- ◆ 生涯的自己指導

9

生きていくうえ(在り方生き方)での

自己理解・自己管理

- ◆ もの、人、事との出会い(偶然性、必然性)
- ◆ どう意味づけるか(価値観)
- ◆ 何、どちらを選択するか(判断)
- ◆ どのように行動するか(行為)
- ◆ どこを振り返るか(自己省察)
- ◆ どう改善するか(変容)

自己との対話

受容 適応 創造



10

学校教育における方策
初年次からの系統的的位置付け

- ◆ 目標の設定 意図的、計画的活動
- ◆ 組織的、体系的取組(教育課程の再編成)
- ◆ 生徒学生理解と情報の共有(個人カルテの導入、システム構築)
- ◆ 学習内容の工夫と魅力ある授業の創造
- ◆ 教師自身の自己理解と自己管理能力
- ◆ 教師間の協力・協働
- ◆ 学習環境の整備と充実



11

キャリア発達の理論的アプローチの14の命題

- 1.人はパーソナリティの諸側面(欲求、価値、興味、特性、自己概念)および能力において違いがある。
- 2.これらの特性からみて、人はおのおの多くの種類の職業に対して適合性を示す。
- 3.それぞれの職業には、必要とされる能力やパーソナリティ特性の独自のパターンがある。職業に就いている人に多様性がみられるように、個人も多様な職業に就く許容性を有している。
- 4.職業に対する好みやコンピテンシー、生活や仕事をする状況は、時間や経験とともに変化し、それゆえ自己概念も変化していく。このような社会的学習の成果としての自己概念は、選択と適応において連続性を提供しながら青年後期から晩年にかけて安定性を増していく。
- 5.自己概念が変化していくこのプロセスは、成長、探索、確立、維持、解放の連続として見なされた一連のライフ・ステージ(マキーン・サイクル)に集約され、また発達課題によって特徴付けられた期間へ細分化され得る。ミニ・サイクルは、あるステージから次のステージへキャリア移行するときに起こる。または病気や傷害、雇用主による人員削減、必要なる資源の社会的変化、または社会経済的ないし個人的出来事によって個人のキャリアが不安定になるたびに起こる。このような不安定で執行錯誤に直面し、キャリアには、新たな成長、再探索、再確立といった再循環(リサイクル)が含まれる。

12

6. キャリア・パターンとは、到達した職業レベルである。また、試したものであれ安定したものであれ、経験した職務に従事した順序、頻度、期間を意味する。キャリア・パターンの性質は、各個人の親の社会的経済的レベル、本人の知的能力(mental ability)、教育レベル、スキル、パーソナリティの特徴(欲求、価値、興味、自己概念)、キャリア成熟、および個人に与えられた機会によって決定される。

7. どのライフキャリアステージにおいても、環境と個体の要求にうまく対処できるかどうかは、これからの要求(仮あるいは彼女の職業的成熟)にうまく対処する個人のレジリエンスの程度による。

8. 職業的成熟は、心理社会的構成概念であり、それは成長から解放までのライフ・ステージの一連の職業的発達の際に基づいて期待される発達課題と、実際に遭遇している発達課題とを比較することによって操作的に定義できる。心理学的視点からは、現在遭遇している発達課題を達成するために必要な認知的・情緒的資源と、個人が現在もっている認知的・情緒的資源とを比較することにより操作的に定義できる。

9. ライフステージの各段階を通しての発達は、部分的には能力、興味、成熟を容易にすること、対処行動、そして部分的には現実的思考や自己概念の発達における援助によって進められる。

10. キャリア発達とは本来、職業的自己概念を発達させて実現していくプロセスである。キャリア発達のプロセスは結合と妥協のプロセスであり、そのなかで、うまれもった個性、身体的特徴、様々な役割を観察したり担ったりする機会、役割をこなした結果を上司や仲間がどの程度承認しているかの自己認識との間の相互作用によって自己概念はつくられる。

13

11. 個人要因と社会要因の間、および自己概念と現実の間の統合あるいは妥協の過程は、その役割が空想の中、カウンセリングの面接の中、またはクラス、クラブ、アルバイト、初色のような現実生活活動の中で演じられようとするであろうと、その役割を演じ、フィードバックから学ぶことである。

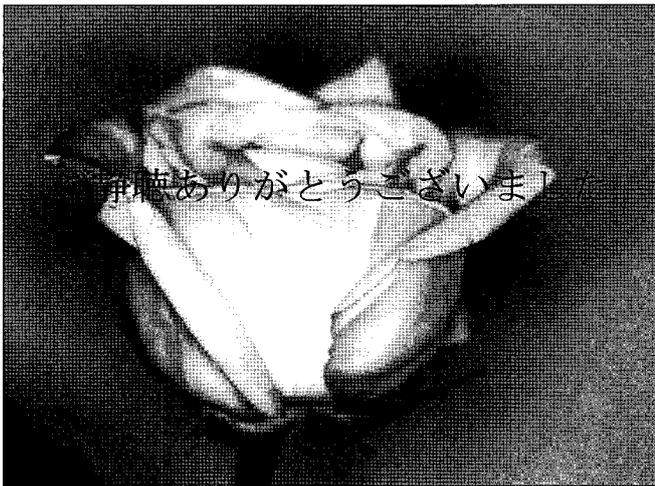
12. 職業上の満足や生活上の満足は、個人の能力、欲求、価値、興味、パーソナリティ特性、自己概念の適切さはけ口をどの程度見つけるかによって決まる。満足感とは人がその役割を通して、成長と探索的な経験は自分に適しているそして当てはまるという考えに導く役割の種類を演じられる生き方と仕事場面、仕事の種類における制度による。

13. 人が仕事から達成する満足度は、自己概念を具現化してきた度合に比例する。

14. 仕事と職業は、たいていの人にとってパーソナリティ構成の焦点を与えるが、しかし何人かの個人にとっては、この焦点は仕事や職業が周辺的であったり偶発的であったり、全く存在していなかったりする。それから、余暇活動や家事のようなほかの焦点が中心的になることもある。社会的伝統(性別役割におけるステレオタイプやモデリング、人種的民族的偏見、好機(構造)はもちろんだ、個人差は、労働者、学生、余暇人、家庭人、市民のような役割のどの役割を重視するかの重要な決定要因である。

引用参考文献
 Super, D. E., Savickis, M. L., & Super, C. M., The life-span, life-space approach to careers. In D. Brown, L. Brooks, & Associates(Eds.), *Career choice and development* (8th ed.). San Francisco: Jossey-Bass, 1996, pp. 123-126
 『新版キャリアの心理学 キャリア支援への発達のアプローチ』渡辺三枝子編著, ナカニシヤ出版, 2011

14



15

静聴ありがとうございます